

「私がまだ知らない土砂災害」

渋川市立渋川中学校 一年 浅田 宇琉

私は、自然は私たちの生活にとっても身近で安心できるものだと思います。けれど、その自然が突然大雨によって恐ろしい姿に変わることがあります。それが土砂災害です。

土砂災害について最初に聞いたときは、「山のしや面が崩れる」という説明だけでは正直あまり実感がわきませんでした。でもニュースで、町の家や道路が土砂で埋まってしまう映像を見たとき、本当に衝けきを受けました。大きな音とともに茶色い流れが押し寄せ建物や車を一しゅんで飲み込んでしまいます。その迫力は怖いというよりも「信じられない」という気持ちが強かったです。人が作ったものが自然の力の前ではこんなに簡単に消えてしまうのかと思いました。

もし自分の町で同じことが起きたらどうだろうと考えたことがあります。学校へ行く道や友達の家のある通り、自分の部屋。そうした身近な場所がある日突然なくなってしまうのは想像するだけでも苦しいです。特に怖いのは、大切な人たちの命が危険にさらされることです。物はまた手に入れることができても、人の命は二度と戻らない。そう考えると土砂災害は「自然現象」という言葉では表せない重さを持っていると思います。私は実際に大雨の中を歩いた経験はないけれど、もし外に出たらきつと道の様子と普段とまったく違って見えると思います。水の勢いで足元がすぐわれそうになったり、側溝からあふれ出した水がだく流のように流れていたり、それを想像しただけで、自然の力に人間が逆らえないことがよくわかります。普段静かな町が、一しゅんで危険な場所に変わってしまいます。

避難所に行くことになったらどうだろうと考えたこともあります。大勢の人が集まって知らない人とも同じ空間で過ごさなければならぬと思います。けれど、もしそんな場面に出会ったら、自分にできることを探したいです。小さい子たちを安心させたり、困っている人に手を貸したり、中学生の私には大人のように大きなことはできなくても、「誰かの役に立ちたい」という気持ちは持てるはずですよ。

また、普段の生活がどれだけ幸せなのかを考えさせられます。家族と食事をしたり、友達と笑ったり、学校で授業を受けたり。そうした当たり前の毎日は本当はとても大切なものです。土砂災害のこと考えると「日常があること」「自体のありがたさに気づかされました。」

災害は完全にふせぐことはできない。でも被害を減らすことはできると思います。テレビで「逃げおくれ」が多いと聞いたことがある。私もきつと「まだ大丈夫」と思ってしまいそうです。けれどその一しゅんの判断で命が助かるかたすからないかがきまります。だからこそ、家族とひ難場所を話し合っておいたり、非常用の水や食べ物を準備したりすることが大切なのだと思います。中学生の私にできることは小さいけれど、「準備しておこう」と家に声をかけることならできます。

そして、土砂災害を考えることで「今生きていること」の意味も深く感じられるようになりました。毎日を過ごすとき、私たちはつい「当たり前」に思ってしまう。朝起きてごはんを食べ、学校に行き、友達と笑い、家に帰って眠る。そんな何気ない一日の積み重ねが、実はどれほど幸せなのか災害のニュースを見て気づきました。災害で生活を失った人たちは、まさにその「当たり前」を取り戻すために必死にがんばっている。だからこそ私も自分の当たり前を大事にしていきたいと思えます。さらに、こうした気持ちを持ち続けることで、身近な人への感謝の心も深まる気がします。家族がそばにいることや友達と笑い合えることは、実は奇跡のようにありがたいことなんだなと、改めて深く強く感じました。